

### 【第2回大韓聖公会社会宣教研修旅行】

6月に実施：今回は大田教区の働きについて学びました。



金堤高齢者福祉館での参加者全体写真



全州分かち合いの家の児童館



高齢者内職作業所にて



月水金ののりばんは地域の在日高齢者のオモニたち（一度ハルモニと書いてしかられた）の楽しみの食事会。時々センターの関係者も来ます。この日は監事の長野泰信さんも楽しいひとときを過ごしました。



東成区役所の落語「代書家」にある碑、4代目桂米團治（桂米朝の師匠）が体験を元に作った。原作では1920年代の朝鮮語なまりの日本語を話す済州島出身者が出てくる。

# あの子どもたちの笑顔が陰ることのないように

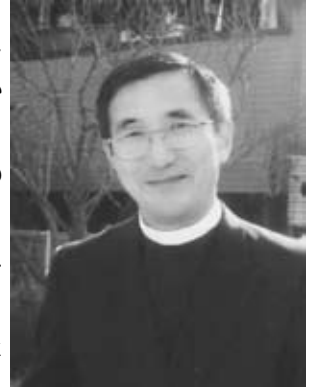
施洗者ヨハネ 山本 眞

ウルリムに原稿を出すようにと言われ、そういえば今まで何も書いてこなかったなと気づかされました。聖ガブリエル教会が生野区小路東に教会を建設しようとしたときに、わたしたちは、教会と保育所と地域活動センターというかたちでの働きを描いたのでした。1992年に建物は完成し、専任牧師を迎え、博愛社の乳児保育所もスタートしました。地域活動センターはその前年から聖公会生野センターと名前を変え、呉光現さんを専任主事として迎えて開設準備を進めてきていました。それまでは生野地域にある教派を超えた八つのキリスト教会と韓国 YMCA でつくる生野地域活動協議会の主事をしてくださった呉さんだったのですが、聖公会生野センターができるときに引き抜かれたのでした。このこと責任はわたしにあるのですが、その後、呉さんは教派の違いにもめげず、よく我慢しながら今まで育ててくださった、と感謝しています。生野を離れて12年になりますが、未だに、あの頃あんなことがあった、こんなことがあったと懐かしく思い出されます。

この原稿を書こうと、昔の大阪城南キリスト教会の「月報城南」を引っ張り出してみているうちに、懐かしい思い出がよみがえりました。1988年からのことです。夏休みに近隣の子どもたちを集めて「城南子ども会」をするようになったのです。最初のころは7月下旬の10日間、そして8月下旬の10日間でした。毎朝20人ほどの子どもたちがやってきて、賛美歌を歌ってお祈りをしてそのあとは、午前中勉強、お昼ご飯を食べると午後は工作をしたり、南港まで泳ぎに行ったり、工場見学をしたり、学校の宿題の「自由研究」のお手伝いでした。昼食はわたしの連れ合いと教会の婦人数人が作るのですから、とても大変なことでした。今から思えば、「よくやったなあ」です。今ではとてもできません。「若かった」のひとつことです。

でも、思い出は、そこで出会った子どもたちです。日本人の子どもはごく少数でした。山本家の子どもたちです。あとはほとんどが在日韓国・朝鮮人でした。本名を名乗る子もいました。日本名の子

もいました。本名だけど日本語読みの子もいました。韓国籍も朝鮮籍もいました。でもそんなことは子どもたちには関係のないことでした。とても力強く、いきいきとエネルギーギッシュな子どもたちでした。わたしも、わたしの連れ合いも彼らからどれだけエネルギーを貰ったことでしょうか。この働きは1994年まで続きました。1995年から途絶えたのですが、思い起こせば阪神淡路大震災の後、その救援やらでバタバタしていたことが原因かもしれせん。



あのときの子どもたちも、もうみんな成人しました。先日NCC青年協議会の文書の中に、一人の名前を発見しました。こんなに立派になって、こんな働きをしているんだと嬉しくなりました。ある子は中学から東大寺学園に進みました。末は医師になるんだと言っていました、なつたでしょうか。家業のキムチ屋を手伝っていた子もいました。今でも朝鮮市場に行くと、いないかなとキョロキョロしているわたしです。

聖公会生野センターのこととは違うことばかり書いてしまいました。聖公会生野センターの働きは生野地域の高齢者（特に在日の）、障害者・児を始め、多様な地域のニーズを見詰めながら進んできました。これからはますます多くの働きが求められることでしょうか。わたしの思い出の中に生き活きと生き続けているあの子どもたちの笑顔が陰ることのないような生野に、日本にならなければなりません。聖公会生野センターの働きがますます豊かなものとなりますようにお祈りすると共に、支えていかなければならないと決意を新たにしています。

（やまもと まこと 元：聖ガブリエル教会牧師・大阪城南キリスト教会牧師、現：芦屋聖マルコ教会牧師・愛光幼稚園園長）

司馬遼太郎の『坂の上の雲』が評判である。10月21日の新聞に大きな広告が載っていたので書店に行って購入した。『文藝春秋「坂の上の雲」日本人の奇跡』（12月臨時増刊号）。「世界が驚愕した偉大なる日本人」「10人のリーダー『決断の極意』」「私の中の『坂の上の雲』」などの見出しが躍っている。ふと横を見ると『週刊司馬遼太郎6「坂の上の雲」の世界【青春編】』というのが積んである。「日本人の美しい心を再発見してほしい」「『坂の上の雲』が描いた凜とした日本人の精神」……。頁をくっていると、「これまで『坂の上の雲』は単行本と文庫本を合わせると累計1800万部以上出版されている『国民小説』である」という言葉が目飛び込んできた。『坂の上の雲』は昨年、今年、来年と、3年にわたってNHKスペシャルドラマとして放映されるという。

京都教区では有志で「韓国訪問分ち合いの会」というのを3ヵ月に1回程度続けているが、前回の9月16日、京都復活教会信徒の松本明さんに「司馬遼太郎の『坂の上の雲』見られる日本優越史観を問う」という題でお話しいただいた。松本さんのお話の一部をご紹介します。

○これは「少年の国＝日本」がひたすら「坂の上の雲」を目指し、「満州」の支配を目論んだ「世界の陸軍国」ロシアを破り、世界の「一等国」に仲間入りした「明るい明治」の一大イベントとして描く。日露戦争はロシアの侵略を打ち砕いた「祖国防衛戦争」とする史観に貫かれている。○今年、2010年は「日韓併合」から100年に当たる。1905年日露戦争に勝利を収めた日本は同年11月に「第2次日韓議定書」を締結し、当時の「大韓帝国」の外交権を奪い、日本の保護国とし、「韓国統監府」を漢城（現ソウル）に置いた。

○日清・日露両戦争とも主たる戦場は、朝鮮であり、「満州」でありました。つまり、司馬遼太郎の目には踏みつけにされた朝鮮・中国民衆へ

の苦しみが写っていません。

○日本は明治維新以来、1910年の「日韓併合」に至るまで、自国の「利益線」として朝鮮を我が物にしようと狙っていました。司馬遼太郎氏が描く「明るい明治」は朝鮮人にとっては「悪夢の時代」です。

松本さんのご指摘に従って私も文庫本『坂の上の雲』を開いて見た。このように書かれている。「日本は維新によって自立の道を選んでしまった以上、すでにそのときから他国（朝鮮）の迷惑の上においておのれの国の自立をたもたねばならなかった。」

「日本は、その歴史的段階として朝鮮を固執しなければならない。もしこれをすてれば、朝鮮どころか日本そのものもロシアに併呑されてしまうおそれがある。この時代の国家自立の本質とは、こういうものであった。」

このような断定的な言い方によって多くの日本人は説得され、共感してしまうかもしれない。しかし司馬氏に決定的に欠落しているのは、松本さんが言われるように踏みつけにされた側の視点である。「他国（朝鮮）の迷惑の上においておのれの国の自立を」と言うが、「迷惑」を受ける側は受けても仕方がない程度にしか見られておらず、尊厳ある固有の主体的存在とは認識されていない。

司馬遼太郎は大阪外国語大学の出身であり、私の先輩に当たる。しばらく前、大阪外大（現在は大阪大学外国語学部）の同窓会誌「咲耶」が送られてきた。開くと、6月に行われた大阪大学司馬遼太郎記念学術講演会「近代日本の原風景」のことが記されていたが、その報告は「文と武がほどよく調和していた明治期の話題で盛り上がった」と締めくくられていて、どこにも日本が強いた隣人、隣国の痛みなどは顧みられていない。「外国語」を冠した大学として恥ずかしいことである。

司馬氏はその後、在日韓国・朝鮮人との交友

ふぶぶの木の下の平和を

司馬遼太郎

『坂の上の雲』

の危うさ

井田

泉



の中で歴史認識を変えていったとも言われ、またミリタリズムが鼓舞されるのを恐れて『坂の上の雲』の映像化を固く断っていたと伝えられる。この時期に『坂の上の雲』がもてはやされるのは大変危険なことである。  
「人はそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、脅かすものは何もないと、万軍の主の口が語られた。」(ミカ 4:4)

「坂の上の雲」に自国の栄光を求めて隣人を踏みつけてきた日本の歴史を反省し、「ぶどうの木の下、いちじくの木の下」に、脅かさず、脅かされない平和の世界を祈り求めたい。「あなたたちは互いに呼びかけて、ぶどうといちじくの木陰に招き合う」(ゼカリヤ 3:10) と主が言われた日の実現に向けて私たちは努力したい。

(いだいずみ 京都聖三一教会牧師)

## 聖公会生野センターメールマガジンが発行されています

8月から不定期に聖公会生野センターメールマガジンの発行を始めました。センター行事などをお知らせと、少し言いたいことを伝えたいこともあります。「口上」と関連行事のお知らせ等を載せています。配信希望の方は聖公会生野センターにメールで申し込んでください。ちなみに口上のいくつかを紹介致します

### 【口 上】(準備第4号) <2010.9.4 発行>

昨日、午後1時頃に神戸の三宮から国道2号線沿いに10分くらい歩きました。目的地に着くと汗だく。猛暑・酷暑といいますが、「異常」という冠をつけたいくらいです。

その日のある会議で、特別養護老人ホームの話が出ていましたが、10年前に始まった介護保険当初の制度設計では国民年金受給者は入所できるという考えでした。私は当初から在日の高齢者を排除している制度として危惧を持っていました。というのも在日の高齢者の70%くらいは無年金だからです。無知な人は「なぜ入らなかったの」と無邪気に言いますが、国籍条項を設けて在日外国人が加入するにできなかったのをこの社会は知りません。

高齢者福祉をおこなっている人々もほとんどの人はこのことを知らない現実に「歴史性のなさ」を痛感せずにおられません。

一番苦勞した私の両親の世代が一番排除されているこの現実を皆さんはどう考えるでしょうか？

### 【口 上】(第2号) <2010.10.26 発行>

今年の夏、濟州の旧知の大学教員から電話があり、台湾の少数民族の雑誌の記者が大阪に行くからよろしく、とのこと。要するに在日の取材の協力依頼でした。

幸いその記者は日本留学経験者で日本語ができました。濟州島からは中国の朝鮮族の院生(濟州大学に在学中)も来て在日を取材していきました。今年はどうも濟州島経由の中国関係と縁があるみたいですね。台湾の雑誌名は「経典」。聖公会生野センターののりばんも写真付きで載っています。HPにUPしました。中国語ですが、写真と漢字で雰囲気をつかんでください。もしも翻訳してくれて送ってくれたら嬉しいです。

中国の朝鮮族の留学生はこう言って濟州島に帰って行きました。「中国にもこれからは少数民族のための文化・教育・福祉センターが必要になると思います」。在日が先進的な取り組みをしているとは思えませんが、中国は急速な近代化でより深刻なのだろうか？ 国家次元ではなくローカルレベルの交流がやっぱり必要だと思った、今年の夏でした。

# 韓国併合から 100 年 = 癒されることのない深い傷 =

金光敏

日本と中国の関係が悪化している。今年夏に 65 回目の終戦記念日を迎えてもなお、アジアでの和解が道半ばということなのだろう。日本は中国に対し、とかく神経を尖らせている。日本がドイツのように過去史への反省を代を超え語り継いでおれば、はたして今のような脆弱な日本とアジアとの関係に留まったか。少なくとも今回の日中関係を見る限りにおいて、互いに「張り合っている」という印象が強い。

去る 8 月 10 日、菅直人首相は日韓併合から 100 年目を迎えて首相談話を発表した。今回の首相談話は、これまでの首相談話を踏襲しつつ、「当時の韓国の人々は、その意に反して行なわれた植民地支配」に言及した点、朝鮮王朝の歴史文化財の引渡し、未来志向の関係に強い意欲を示した点で、日韓政府の間で共感が広がった。韓国の受け止めはおおむね好意的であったと言える。

母を早くに亡くした私をまるで自分の子どものようにかわいがってくれた金さんという近所のアジュモニ（おばさん）がいた。生前の母とも仲がよかったことから、私のことを不憫に思い、成人になった今でもあれこれ気を使ってくれる。アジュモニは在日二世で、生野に暮らす在日の多くが従事したヘップサンダルの仕事をしていた。アジュモニの娘と年が近く、中学校の頃、民族学級で共に学んだ仲間だった。

金さんのアボジは、炭鉱に強制連行された。戦後間もなく、金さんが小学校 1 年生の頃、肺病を患って亡くなったが、炭鉱で吸い込んだ粉塵が死を早めたという。貧しさのために葬式もあげられず、オモニが親戚とともにリアカーで遺体を運び、火葬場で荼毘に付した。金さんは、すでに 58 年経った今でもそのことを思い出し、涙を流す。

日韓政府間で政治的節目を迎えたとして、私たちが在日コリアン一人一人に刻まれた過去の傷は癒されることはない。原爆や空襲によって家族を失った日本人被害者の深い悲しみと同じだ。自らの意思が届かない巨大な国家の力に翻弄され、他を責めるよりも、自らの人生がこのようにしか歩めなかったことを自問自答する。その苦しい問いを傷つけられた人々は歳月を重ねながら抱き続けている。

今回の菅直人首相の談話に反対した政治家たちがいた。植民地支配の反省が国益に反するのだという。領土問題では中国になめられていると語った人々と重なる。幕末に見境なく流行した攘夷論のようだ。

政治、経済に混沌とした世にナショナリズムははびこりやすい。だが、国粋主義を拒む社会の成熟も広がる。市民社会のバランス感覚はまんざら悪くない。が、あとは大衆を扇動するマスメディアの質だろう。マスメディアを疑ってかかることも必要だ。（きむくあみん コリアNGOセンター事務局長）

## アイゴーアイゴー ウェーワッソー

中村 香

韓国名ユン・クンジャ、改め日本名、藤沼君子  
85 才は、栃木は宇都宮の田沼で生まれた。22 才  
で韓国人の夫を追って韓国に渡る。現在韓国は全  
羅南道の海南郡に住む。

韓国名イ・ヒサ、日本名、李久子は宮城県に生  
まれる。父は古物商を営んでいたという。戦時中  
の 23 才に日本で出会った韓国人と結婚し、子ども  
を 2 人授かる。戦争が終わり 28 才の時にやはり夫  
を追って韓国へ渡る。韓国でも 2 人の子どもを産  
むが、夫が早くに亡くなり、それ以来韓国で農業  
をしながら子どもを養い育てた。今や 93 才。

二人ともたまたま同じ町内に住んでいる。二人  
とも韓国に来てから一度も日本に帰っていない。  
二人ともほぼ日本語を忘れていた。

日本人のハルモニ（おばあちゃん）に出会って  
しまった、海南にて。農業団体である日本の愛農  
会と韓国は正農会の交流会が韓国で開催され、歓  
迎会の場に二人は招待された。

「日本の方です」と紹介されても車いすに座って  
いる二人は全くもって韓国のハルモニにしか見え  
なかった。クンジャハルモニは若干日本語を覚え  
ていて日本語で話しかけたら日本語が帰ってきた  
が、ヒサハルモニはほとんど日本語を覚えていな  
くて、もう忘れてしまった、と言った。日本人の

私を見て、私が韓国語を話せるのを知り、バババ  
ババッと韓国語で話はじめた、自分達の人生のこ  
とを。しかしながら二人の話す韓国語は方言が強  
く、ほとんど聞き取ることができない。分かった  
のは、戦時中に韓国人と結婚し、戦後に夫を追っ  
て韓国に渡ったこと。韓国語は全くできないし知  
り合いもないし、大変苦勞されたということ。  
日本に帰る機会がないまま、親戚との連絡も絶え  
てしまったとのこと。死ぬ前に一度日本に、故郷  
に帰りたいということ。

「お嬢さん、あなた日本人なの？なんで韓国語が  
話せるの？」

「あ、私、韓国人と結婚して、韓国に住んでるん  
です。」

「アイゴー（哀哭：感嘆詞）！韓国に住んでるっ  
て！？旦那さんは何をしているの？」

「田舎で一緒に農業してます。」

「アイゴーアイゴー ウェー ワッソー！（アイ  
ゴーアイゴー、なんで来たの！）」×10

ヒサハルモニは私の手を片手で握って、もう一  
つの手で私の手をペチペチペチペチ叩いた。ハル  
モニ、そりゃ私も聞きたいわ。苦笑いをしながら  
ハルモニの手をギュッと握る。一日本人のおばあ  
ちゃんがこんな片田舎にいるなんて、（ま、お互

# クリンもだん美術展 2010

★会期 2010 年 11 月 29 日 月曜日～12 月 11 日 土曜日  
午前 11:00～午後 7:00（最終日午後 5:00 まで）

★会場 應典院 WALL Gallery

〒543-0076 大阪市天王寺区下寺町 1-1-27

TEL 06-6771-7641 / FAX 06-6770-3147 / E-mail info@outenin.com

地図は下のHP参照

[http://www.outenin.com/modules/contents/index.php?content\\_id=17](http://www.outenin.com/modules/contents/index.php?content_id=17)

いそう思っていたのだが、、！)。

後に母が送ってくれた朝日新聞の記事で知ったのだが、戦前戦中に結婚し韓国に渡り差別と貧困の中にあった日本人女性のための施設、「ナザレ園」が慶州にあるという。永住帰国を事実上断念し終のすみかとしている日本人女性が現在 20 人、共に住んでいる。そしてそのような在韓日本人女性は韓国に 1000 人ほどいると言われている。

日本人ハルモニに出会ったのは、私にとって衝撃的な“事件”であった。かなりの動揺。思考の停止。

自分の自由意思と選択で韓国にきた自分、戦後頼る人がいなくて夫を追って韓国にきたハルモニ。したくてやってる農業、やるしかなかった農業。アイゴー、アイゴー、ペチペチと私の手を叩くハルモニ、叩かれる私。私とハルモニがだぶる。

韓国人や在日の若者が、日本に住んでいる在日の韓国ハルモニを見て心を痛めたり涙を流すのを私は何度も見た。私も一緒に心が痛んだ、のは事実だ。が、実際に韓国に住んでいる日本のおばあちゃんを見てようやくようやく、本当の彼らの痛みが分かった、というか、分かっていなかったことに驚いた。当事者でないと本当の痛みは分からない。結局私は韓国の痛みについて、何にも分かってなかったんじゃないかという衝撃。凹んだ。

そして私の中で突如として顔を出した“日本人さ”というもの（これが民族性というものなのか?）。「帰りたくても帰れなかった、そして帰らなかった“日本人”が韓国にいる」ということが、



こんなにショックで心が痛むことを私は知らなかった。

そして同じように、いやもっと多くの、「帰りたくても帰れなかった、そして帰らなかった“韓国人”が日本にいる」ことの痛みを、今度こそ忘れないでいたい。

やはり、「戦争は終わっていない」ということを、改めて言いたい。韓国に住んでいて触れる、生々しい傷跡。韓国にしても日本にしても、被害者にしても加害者にしても、戦争はいまだ終わっていない。ことに日本は、終わったものとしてはならない。残念ながらこれから先戦争を終わらせる責任は、戦争を知らない私たちにまで及んだ。韓国併合 100 年を向えた今、私たちは何をすべきなのか。一つ一つ、終わらせていきたい。

君子おばあちゃんと久子おばあちゃんが日本に、故郷に帰れる日。私はその日を作りたい。

(なかむら かおり 韓国在住)

## ★シンポジウム「知的障がい者の人生考」

12月5日(日) 午後 2:00 應典院研修室 B

### パネラー

浅海 奈津美 (学校法人聖母女学院短期大学 生活科学科 准教授)

西川 茂 (現代美術作家) \*アメリカに知的障がい者のグループホームに一年間滞在。ともに生活を送る。

\*\*\* 知的障がい者にとってのより良い生活環境とは何か? 知的障がい者の人生とは? \*\*\*

今回は日米という文化、生活、考え方の違いを探ることで日本での知的障がい者の生活を考えるために西川さんはアメリカでのグループホームでの生活体験を、浅海さんには日本の知的障がい者の生活していくうえでの様々な課題を話していただきます。

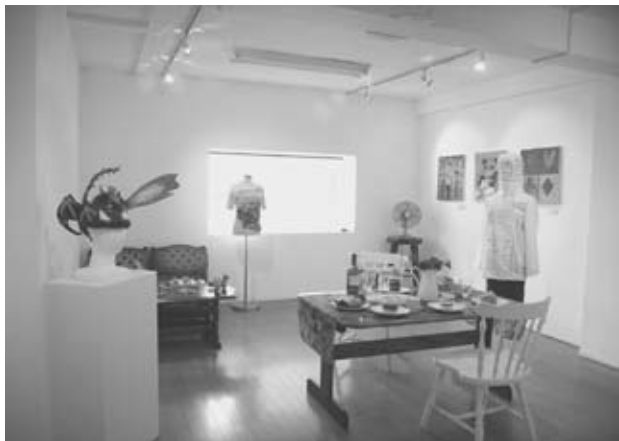
## ★レセプションパーティー

12月5日(日) pm.4:30 - pm. 6:00 應典院研修室 Bにて



# クリンもだん美術教室の可能性

大澤 辰男



クリンもだん美術教室の講師となり、11年が過ぎました。当初は小学校6年生から22才の7人程度が学ぶ小さな教室でした。

現在は、障がい者・健常者の31人となり、授業日も水・木・金・土(2回)の計5クラスとなり、11年前当時から受講している人も小学生は23歳になり、22歳だった人は33歳というように教室とともに年齢を重ねました。

この間に教室は大きく変化しました。展覧会の数も増え、個展を催す受講生も出てきました。教室の名前も“全国区”になり、障がい者アートを行っている団体・施設のほとんどがクリンもだん美術教室の名前を知っています。教室がこんなにも変化したのも受講生が真剣に作品に取り組み、質の高い作品を制作してくれるようになったからです。

具象的な作品を作る・描くことは、誰もが大好きです。とても個性的な作品を制作します。しかし、具体的な対象がない中から作品を作るとはとても難しく、例えば色彩が綺麗だからその綺麗さだけを表すとか、激しさだけを表現するとか、誰もが持つ感覚・感情で個人差があって共有・共感しにくい事柄など、説明するのにたくさんの言葉を使わなければ伝わりにくい表現など、抽象的な事

柄を見える形の作品にするというのは本当に難しいことです。

しかし、クリンもだん美術教室には、驚くことに抽象的な作品を描くことができる受講生が出てきました。私の経験から言うと知的障がい者の多くは抽象概念を持つことが苦手なようです。具象的な絵を描こうとして、上手く描けずに結果として抽象的な絵になってしまう作品は多くあります。また、障がいが高く、絵具を塗る行為しかできずに抽象絵画みたいになってしまう作品もあります。

クリンもだんの受講生たちは最初の描くイメージから抽象的に描くことができます。これは、高等なすばらしいことです。授業の指導では、抽象画を教えることができません。本人が考えて考えたあげく、制作できるようになりました。抽象画を描く難しさは、一度でも絵を本気で取り組んだ者にしかわかりません。また、知的障がい者が何かを表現することの大変さが理解できなければ、本人の変化・可能性を見出すことができません。現在、そのような作品が制作できる受講生は3人ですが、今後の受講生の作品の可能性、美術指導の可能性、知的障がい者への可能性を感じられる出来事です。障がいを持つ人、特に知的障がいがある人たちには美術活動・教育がその人たちの可能性を広げるには、とても有効なことだと感じます。

このような可能性に出会った時に、「ここに来て良かった、講師を続けてきて良かった」などつくづく思います。受講生たちの可能性に出会い続けられるかぎり、私たちのやらねばならないこと、存在意義が高まっていくと思います。

(おおさわ たつお 聖公会生野センタースタッフ  
クリンもだん美術教室 アートディレクター・講師)



ハン ミヨンスク パク ソンジュン  
**韓明淑・朴聖焮 『愛はおそれない』**（朝日新聞出版）



いま韓国で最も注目すべき女性を挙げるとしたら、誰でもいいですか？ わたしは韓明淑の名を挙げたい。盧武鉉政権のとき女性初の首相（総理）になり、先のソウル市長選挙では折からの逆風にもかかわらず、いま一歩のところまで保守候補を追いつめた。李明博政権の贈収賄事件デッチ上げ攻撃に際しては、毅然とそれをはね返した。そしてなにより記憶に残るのは、盧武鉉前大統領の葬送の折、葬儀委員長として行なった感動的な弔辞だ。

『愛はおそれない』を読むことによって、その人間的誠実と韌さをあらためて知る。

本書には「韓国・獄中からのラブレター」との言葉が付されている。ずばり。韓明淑・朴聖焮夫妻の獄壁をへだてた愛の手紙の交換譜である。

二人が結婚してわずか7カ月のちの1968年7月、夫は「統一革命党事件」に巻き込まれて連行される。借りて読んだ本が禍いしたのだ。それから13年余り、ときどきの面会はあるものの、二人は離別を余儀なくされる。そして朴聖焮は1981年12月25日、クリスマス特赦で釈放される。

一方、韓明淑は1979年4月、「クリスチャン・アカデミー事件」で拘束され、2年4カ月獄中生活を余儀なくされる。その間の50余日、妻から夫への手紙がとどえる。夫は、妻が死んだと思ったという。妻が死んだのではなく収監されたのだと知ったのは、彼の不安と苦痛の様子を見かねた看守がひそかに耳打ちをしてくれたからだった。

そのような二人の獄内外からの「ラブレター」によって構成された書である。検閲をかいくぐっての手紙である。だから獄中での迫害、不自由、

人権侵害などの受難はほとんど書かれぬ（拷問などその一端が、韓明淑のブログ「ミニ自叙伝」からの証言「絶望の中で取り戻した力」として、書簡のあいだに挿入されているが）。

とはいえ、獄外にあって困窮する家族を助けるための生活とたたかい、不自由な暮らしのなかで読書に励み知識と思想を高めようとする努力、不条理を強いられる社会と人々の暮らしによせる変革への意思——短かい一篇一篇ながら、韓明淑の手紙にはそれらがあふれている。

それによく応えて、朴聖焮の手紙からは獄外で苦勞する妻への気遣いが伝わる。彼にとっても獄中の日々は学びの時であり、日々高められるキリストへの理解がそれを支える。

二人のあいだに交わされる意思の通いはすぐれて異性愛に発するものだが、その愛は同志的なパートナーシップに高められて、愛の極致を示しているのではないだろうか。

ぜひ付け加えなくてはならないのは、訳者・徐勝によるあとがき、訳注、各章に付されたコメントの充満と見事さである。みずからの体験あってこそその読者へのメッセージになっている。

最後に個人的なことをひとつ。わたしも加わるNPO法人三千里鐵道の活動が都相太理事長の名で第12回ハンギョレ統一文化賞を受賞した。その授賞式のため5月26日、ソウルへ行った。その折、民主団体の代表が勢揃いする会場に立ち寄った。天安艦沈没事件の軍民合同調査発表内容の疑惑に抗議する記者会見だった。ちょうど白堊晴氏が発言していて、その隣り中央席に韓明淑さんが掛けていた。謙虚に楚々とした様子で。

（いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表）

## 大橋 議

郵便不正事件の証拠改ざんが露見して大失態を犯した大阪地検特捜部の、一部の検事の「犯行」とは言え、そのいきさつの詳細が明るみにさらされるにつれ、多くの人たちは「検察よ、お前もか」と驚いた。このベテラン検事の姿勢は、「はじめにストーリーありき」。このストーリーに沿って女性局長を追い詰めようとしたが、そのストーリーはボロボロで、証拠を改ざんし、無実の「容疑者」が天下晴れての自由の身に、検事と上司2人が逮捕されるという、推理小説のような「どんでん返し」の結末となった。

けれど、権力を持たない素手の国民は、今度の事件に心が凍るような思いをしたのではないか。冤罪（濡れ衣）で苦しんだ人、いま苦しんでいる人は、どんな思いなのか。無実の罪に苦しんでいる人は、もっと多いのではないか。自

## 人をもて遊ぶ権力者の恐ろしさ

分も何時、被害者になるかも知れない…などと気持ちが重くなる今日である。

この事件を知って、かつてアメリカで起こった「サッコとバンゼッティ事件」を思い出した。それは1920年代に起こった米裁判史上最悪の冤罪事件だった。ニコラ・サッコは靴職人、バルトロメオ・バンゼッティは魚の行商人、いずれもイタリア移民として米マサチューセッツ州で働いていたが、現金強盗容疑で逮捕、証拠不十分のまま死刑に処せられた。この事件にはさまざまな背景があった。2人は「無政府主義者」で、かつ労働運動に関わっていたようだが、政治的、思想的、人種的偏見と検察の圧力によって無実の罪を着せられた。後に真犯人が現れ、2人は名誉を回復したが、恐ろしいことだった。

世の中で、権力をかさに何でも出来ると思っている者ほど、恐ろしい者はない。喝！

## 余韻

■日本の周辺の「国境」がいろいろ騒がしい。「北方領土」の元住民の悲痛な叫びを聞く度に、アイヌの叫びはこの国は聞くことはないのだろうかと思う。国際的にもアイヌの土地であるアイヌモシリ（北海道）が土地の返還要求をしたらこの国の人たちはどう思うだろうか？同じように悲しみの共有が生まれるのだろうか？■今年初めて聖公会生野センターでクリスマスカードを作った。手前味噌かもしれないが「うちならでは」のカードである。「暗闇の民に光」のカードのメッセージが多くの人に届くことを祈っている。■前世紀末に言われた「人権と環境の21世紀」が10年過ぎようとしている。全く逆の世界の状況にただただ愕然とするばかり…■メリークリスマスそして新年が良き年になりますように（ぴっくあんちゃ）

## \*分担金についての説明\*

会計報告の分担金について問い合わせがありました。

これは1992年の開設当時から一定の金額を「分担する」ことからこのように科目を設けています。2010年現在では管区、大阪教区、京都教区、聖ガブリエル教会（大阪教区）が分担金を負担してくださっています。これは聖公会生野センターの財政の安定化に欠くことのできないものです。



高山勝充さん

薄く溶いた油絵の具を丹念に幾重にも塗り込んで描きます。完成まで2年近くかかりました。

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路3丁目11番19号

TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869

E-mail: ikuno@nssk.org

<http://www.nssk.org/province/ikuno>

発行人：大 西 修

編集人：大 橋 襄

ウルリムは再生紙を使用しています。